
何者なんだ、ガレイ君

ガレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何者なんだ、ガレイ君

【Nコード】

N3961BA

【作者名】

ガレイ

【あらすじ】

頭に思っていることを言おうとすると、上手く言葉にならない。短い言葉なら言えるが長台詞になると、どうしてもおかしくなる。しかし、それと引き換えに驚異的と言える記憶力を持っていた。東京の名門といわれる高校に編入することになった。そこで待ち受ける数々の試練、ガレイは無事卒業できるのか。

一日目

——なに言ってるかわかんない——

俺はその言葉を何度も聞かされた。

俺は自閉症患者だった。頭ではいろいろ考えてるさ、だけどいざそれを言葉に出そうとすると

上手く発音できない、短い言葉なら可能だが、長く喋ろうとすると、頭が真っ暗になって、口から一切日本語が出てこなくなる、逆に、おかしい言葉が口を出てしまう。俺はそれで、人から変な目で見られるようになった。だからあまり喋らないようにした。

そんな俺は高校2年生、田舎の辺鄙な所から、東京に上京して、この春から皇帝学園に転入することになった。名門と呼ばれる高校に何故行けたのか、疑問に思うだろう。俺は記憶力が以上に良い、文章を見るだけで自然と頭に入ってくる、すべて一日で覚えた、本当にパラパラと本を捲るだけで何か色のようなものに変換されて頭に入ってくる。関係ないのだが俺は1年前程前から、身体を鍛えるのにはまっている、嫌なことを忘れさしてくれるんだ。

長い廊下を歩く、横には小林美代という名前の俺が編入するクラスの担任の先生が居る。

なにやら世間話をしているが俺は頷いただけだった。担任は目的のクラスの前で止まる。

「はいよ」

スーっとドアがスライドする。喧騒が一瞬で止む。何処となく変な緊迫感が胸を圧迫した。

名門と呼ばれる所以か。俺は一步足を踏み出した。静まり返る教室、俺は教壇に立ち、黒板に名前を書く。

平塚^{ひらつか}臥麗^{がれい}と読む、俺はこの名前が嫌いだ。黒板にはガレイとカタカナ表記にした。何故かって？ その漢字が嫌いだからだ。

「ひい……ガレイ……よろしく」

今日は平塚という言葉が出てこなかった。昨日はガレイという言葉が出てこなかった。

練習したんだが……ひいって俺何に怯えていたんだよ……

「よ、よろしくね、ガレイ君」

担任の口元が歪んでいたのは見逃さなかった。

疎らな拍手が教室を包む、否、暖かい空気が教室を包んだ、と勝手に自分の記憶を改ざんした。

「平塚君の席はあそこになるわ、一年間よろしくね」

ホームルームが終わった瞬間、はい、着ました質問攻めの時間が俺はこれを危惧していた。

だって、あまり喋りたくないからだよ。

「ガレイって漢字じゃないの？」

「クールな名前だな」

「その髪の色地毛？」

「何処から来たの？」

「両親がトレジャーハンターって本当？」

うわあああ！　これがパニックだ。
しかし、俺は冷静に対処する。

「ガレイ……漢字はねえ」

「うん」

「地毛だ」

「アジア」

「コロナ殺すぞ……ビア」

あれ？殺すってなんだ？何言ってるの俺……

一瞬で静まり返る教室、質問した女性は青ざめている。そりゃそう
だろ、俺はすぐさま弁解しようと思いを発する。途端に頭が真っ暗
になった。

「これにはわ、ぎ、質問攻めすんじゃないよカスども、誰に向かっ
て口を聞いているんだ？ああ！？　名門高校つつつても程度が知れる
な、愚民ども、アキャペラメルフィアシラツツエフアラレンツォ！
！！」

終わった。何もかも、俺の周りには人は居なくなっていた。俺は視
線を一人の女性とに向けた、しかし、目を逸らされた。
俺はただ、放心状態で、教室の天井の穴の数を数えていた。

「最悪だ……1、2、3、最悪だビ！」

俺の声は空しく周りの空気を振動させた。

授業が終わる、しかし、誰も近づかない、もう俺の周りは閉鎖空間
だ。速攻恐れていたことが起きた、俺はただ、虚構なる妄想をして、
時間が過ぎるのを待った。

次は音楽の授業だ、俺は音楽教室へと向かった。もちろん一人で。あれから誰も話しかけてこない。音楽教室に入る。壁にはシューベルト、モーツァルトなどの有名な作曲家などの絵が飾られている、そして、やはり名門だろう、恐ろしく高そうなグランドピアノが置いてある、一度弾いてみたかった……だけど、無理だろうな。

「音楽の授業を始めます、まず手始めに音楽担当である、この白水が音楽がどのように素晴らしいのか、皆さんにお聞かせしましょう。いや、聴かせましょう！」

白水先生はグランドピアノのいすに座り、軽快なタッチで曲を弾きだす、やはり名門、教師も一流だ。しかし、俺は先生の音楽には心が動かされない。何故だろう、真っ黒い色が脳を刺激する。ああ、色が無いんだ。俺は反射的に耳を塞いだ。突然、白水先生の演奏が止まる。

「その……そうか、転入生の……平塚君だったね、なぜ私の演奏中に耳を塞いだ？」

うわー最悪のパターンだ、なんて言おう、いや、簡潔に済ませれる言葉……

「グッド」

一瞬で教室が静まり返る、うわ、なんだろう、白水先生の手がプルプルと震えている。

これはきつと、怒っているんだ、真っ赤な色の感情が僕の脳を刺激する。

「平塚君……音楽をやったことは？ あるよな？ だって、私の演奏

がしょぼいんだって言いたいんだな？　そうだよな？　そうだとい
つてよハニイイイイイイ！……！！」

「うわぁ、白水先生が壊れた」

ぼそつと後ろからそう聞こえた、やばい、俺問題児じゃん……これ、
まだ学校生活一日目だぜ？

「平塚君、君の演奏が聴きたい、弾いてみてくれないか？　なあそ
うだよな、みんなぁ！？」

「ガレイ君のピアノ聴きたいかもぉ」

と、なにやら期待の目で見られる、やめて弾いたことないからっ！
そこの女性徒、乗ってこないでまじで。

「む……ろんだです！」

無論？　え？　なに……言ってるの……俺　無理って言葉すら言え
ないのかよ！

「そうかそうか、さぞかし素晴らしい音色を聴かせてくれるんだろ
うな、先生は楽しみだぞ」

通じてるのかよ！

白水先生の口元が歪む、ああ、ああ、もうどうにでもなれ。

俺は、せめてこれから起こるであろう悲惨な未来を思い描きながら
ピアノのいすに座った。

鍵盤の上に手を置く、変な緊張が生まれる、額には脂汗のようなも

のが、脂汗が出ている。俺は白水先生の真似をした。なにが一番効果的な音色か、色の感情が、鍵盤の音を伝って、俺の耳に響く、ああ、鍵盤の弾き方なんて知らない、ただ感情のままに弾いた、鍵盤の位置をすべて覚え、眼を瞑って、白水先生の手の位置を思い返しながらか、それにアレンジを加えて、弾いた、弾いた、音色の色はレインボーに変わる、ああ、ピアノってこんな心地いいのか、俺は感情の儘に鍵盤を叩き続けた。

弾き終えると、静寂が教室を包む。うわ、やばい、やらかした……まあ、初めてだし仕方が無い、ないんだ！俺は自分が満足したし、まあそれでもいいかと思っていた。

そう思っていた刹那、拍手が爆発的に起きた。

「ガレイ君素晴らしいわ！」

「お前すげえー俺演奏で泣いたのなんか初めてだ！」

「惚れそう……」

「一体何年ピアノやってたの？」

「プロがいる！？」

皆涙を流していた、え？ 涙？ どういうこと！

白水先生を見ると白水先生も涙を流している。

「素晴らしい演奏だった、ガレイ君……認めたくないが君は、素晴らしい、私は今まで、演奏は技術だと思っていた、君のは違う、暖かく、時には冷たく、さまざまな感情が私を音色の世界へと誘ってくれた、こんな感情になるのは何年ぶりだろうか、君が耳を塞いでいた時は——とても素晴らしかったよ、君は、誰から演奏を教わったんだい？」

「初めてだ」

キンコーンカーンコーン

グッバイマイスクールライフ！

「ガレイ様って音楽の才能あるんだねえ……」

「正直俺は鳥肌が立った、あれほどの音楽は聴いたことがない、なにか、違う次元だった」

「話しかけたいな」

「やめとけて、ガレイ様は俺たちの戯言に付き合うことなんかしねえー」

「ガレイ様ってなんかクールでかっこいいよね」

「正直いけすかねえー野郎と思ったが考えを改めたわ、まじですごい演奏だったもん」

口々に陰口を言われている気がする……ああ、これ学校生活一日目だぜ？

音楽の授業が終わり教室へ戻り、席に着くと周りの生徒がチラチラ俺の方を見ながら話している、もう確実に陰口が始まっている。何言ってるんだろう、でも俺が行ったらあれだしなあ……

時は過ぎ、昼休みになった。一人で弁当を食べる。うわぁー今日はタコウィンナーだあ！

俺が作りました。

悲しすぎる。一人ぼっちの学校生活、これから俺はどうなっちゃうんだろうか。

周りの生徒も相変わらずチラチラ見てるし、うわぁあああああ！

「ご一緒よろしくて？」

唐突に声を掛けられた。俺？俺？俺だよな？
視線を上げると、金髪の女性徒が居た。もしかして、俺に話しかけてる？

目の前に俺しか居ないよな？ うわ！ ありがとう、神は俺を見捨てなかった。

「ああ」

ああ、って何ですか、驚いた俺は、そんなこと言ってしまった。

「先ほどの演奏、とても素晴らしかったですわ、平塚さん、初めてって言っていましたけど、本当なのかしら？」

「ガレイ……て呼ぶべ、ゴホンゴホン！」

はい、オワタ。咳き込むとかなんなの俺。

「大丈夫？」

背中をさすってくれる……名前……知らない優しい女性徒！ 君は女神か

「ああ、ありがとう」

「で、質問、答えて頂戴、本当なのかしら？」

「ああ、本当でえ」

誰だよ俺……

急にもじもじし始める女子生徒、あの名前乗ってくれないとずっ

と女性徒って表記になっちゃうんだけど。

「名前」

「えっ!？」 あっ、わたくしとしたことが、失礼しました。わたくし、峰坂マキリと申します、あの、平塚さんに折り入ってお願いがありますの、明日の放課後、わたくし、の家でピアノを演奏してく
らさないかしら？」

俺初心者……てか、名前って俺どんだけだよ……

「ああ」

「えっ!？」 よろしいのですか!？」

「ああ」

「ありがとうございます」

なんか、話が奇妙な方向に進んでいる。そして、この流れは止められないのだろうか。

「すげえ、あの峰坂さんが、ガレイ様に声を掛けたぞ」

「なに話してるんだろう……」

「峰先様あゝ」

「おいおい、この物語は一体どうなるんだ!？」

なにやら、また陰口叩かれている、もう慣れよういっそ、峯崎さん、俺みたいな奴に構ってくれてありがとうございます!

放課後を告げるチャイムが響き渡る。どこか寂しい水色の音色
俺は鞆を持ち教室を出ようとする。

「平塚さんご一緒しませんか？」

峰先さん！

「ああ」

「俺もいいかい？」

お、誰だ？初めての男子生徒だ。

「俺もいいかな？」

おお！？誰だ！？二人目の男子生徒だ！

「私もいいですか？」

おおお！？

「俺も！」

「僕も」

「私も」

「うちも！」

おおおおお！？

次々と生徒が集まってくる

「部活は？」

「明日からのの」

はい、カオス、教室の生徒総勢36名、俺を先頭に一斉に教室を出て行く。

なんだこれ。ほかのクラスの生徒はみな、驚きの顔を浮かべてい

る。

ああ、だって、こんな状態意味不明だろ？だれだって驚くわ。これ一日目だぜ？俺はそろそろと生徒を連れて歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3961ba/>

何者なんだ、ガレイ君

2012年1月10日12時45分発行